

2021年8月29日 礼拝説教要旨

詩編講解説教75「驕りを捨てて」

詩編75：2～11、マタイ20：25～28

詩編第75編は特徴ある構造をしています。細かい話になりますが、2節「あなたに感謝をささげます」この部分の主語は「わたしたち」一人称複数形の言葉です。ところが3節をご覧ください。「わたしは必ず時を選び、公平な裁きを行う」ここは「わたし」一人称単数形なのです。ですから注意して見ていただきますと、3～6節のところは鉤括弧に入っています。11節もそうです。ここも主語は「わたし」になっていますが、ここが鉤括弧に入っています。ヘブライ語の原文には鉤括弧はないのですが、新共同訳聖書は3～6節と11節を鉤括弧に入れて、ここを神さまの言葉、神さまの語りの言葉として訳しています。つまり第75編は、2節、7節以下のわたしたち人間の側の言葉と、3節以下の神さまの側の言葉、神さまの語りかけの掛け合い、対話のようなものになっているということです。このような神さまと会衆の掛け合いという構造から、多くの学者はこの詩編が礼拝に由来していると言います。

3～6節に注目してください。ここは神さまの語りの部分ですが、そこではわたしたち人間の驕りが戒められております。「わたしは驕る者たちに、驕るなど言おう。逆らう者に言おう、角をそびやかすな」(5節) 礼拝の言葉として用いられている詩編が、人間の驕りを戒める内容になっていることは意味深いことだと思います。いかに人間が驕り高ぶりに生きているかということでしょう。またここでは「角」が出てきます。この「角」は力の象徴ですが、例えば闘牛の牛のように角を向けて刃向かってくる。挑戦的な態度をイメージすることができます。角をそびやかすというのは自分に力があると過信する。それゆえに相手を威嚇したり、攻撃的になるということです。

わたしたちが生きている社会は、特にこのコロナ禍にあって、非常に殺伐として、殺気立っているように感じます。よく「怒りをどこにぶつけたらいいのか」ということを言いますが、誰かを攻撃することでストレスを解消しようとする。児童虐待が昨年度は過去最多となったというニュースがありました。家庭の中に暴言、暴力が日常的にあります。学校や職場でのいじめも後を絶ちません。いろいろなところで角がぶつかり合っている。またそこで傷ついている人々がいるのです。

なぜ人はそのように角をそびやかすのでしょうか。その背後にはやはり人間の罪があると言わなければなりません。創世記の蛇の誘惑のところを思い出します。アダムとエバが神さまとの約束を破り、食べてはならない木の実を食べてしまう。それは神さまのようになれる、人間が神さまのように善悪を判断することへの誘惑です。物事の良し悪しを神さまではなく、自分が基準となり決めることができる。そこにすでに驕りがあります。今月、オンラインで中高生修養会があったのですが、そこである牧師がこの創世記の話をしました。その牧師の話にハッとさせられました。蛇から「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」と問われて、女は「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてはいけない、死んではいけないから、と神さまはおっしゃいました」(創世記3：2～3)と言います。本当に神さまはそのように言われたのでしょうか。聖書を注意して見ると、神さまは「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」(創世記2：

16～17)と言われた。エバはこの神さまの言葉を正しく聞き取っていません。神さまは「善悪の知識の木」とはつきりおっしゃっている。ところが女は「園の中央に生えている木」とし、また「触れてもいけない」と余計なことを足している。確かにそうです。神さまの言葉を正しく聞き取らず、さらには自分で勝手に言い換える。そこに問題があるとその牧師は言いました。そこに人間の驕りがあるのです。それは神さまの言葉を正しく聞けないところから始まっています。そのことをわたしたちは自覚しているのでしょうか。神さまの言葉よりも、自分の言葉、自分なりの考え、自分なりの解釈、自分の知恵で生きているのではないのでしょうか。その驕りが、その後のカインの罪となり、あのバベルの塔の驕りとなって表れてくるのです。

その人間の驕りを神さまは打ち砕かれます。「神が必ず裁きを行い、ある者を低く、ある者を高くなさるでしょう。すでに杯は主の御手にあり、調合された酒が泡立っています。主はこれを注がれます。この地の逆らう者は皆、それを飲み、おりまで飲み干すでしょう」(7～9節) ここには「杯」「酒」のモチーフがあります。いずれも神さまの怒り、裁きを表す言葉です。「調合された酒」というのは、ぶどう酒に蜂蜜を入れて甘くしたものだと言われます。甘くすると口当たりがよいのでどんどん飲んでしまう。それが身を滅ぼすということになる。パウロも「自分自身に対する裁きを飲み食いしている」(Iコリント11:29)と言います。そのように人間に心地よいものがかえって裁きとなって、人間を滅ぼしている。そしてそのことに気づいていない。気づかないうちにもう裁きが始まっているのです。9節の「この地の逆らう者は皆、それを飲み、おりまで飲み干すでしょう」最後の一滴まで神さまの裁きを受ける。この人間の罪、驕りに対して神さまの裁きは徹底されるということです。

それならわたしたちに救いはあるのでしょうか。神さまはイエス・キリストを与えてくださいました。あの十字架こそ、イエス・キリストが神さまの裁き、怒りをお引き受けくださったことに他なりません。この神さまの怒りの杯、裁きをわたしに代わってキリストが飲み干してくださいました。福音書には、十字架の上でキリストは酸いぶどう酒をお受けになり息を引き取られたことが記されます。酸いぶどう酒はぶどう酒に鎮静作用のある薬草を入れたものという解釈があります。まさにこれも「調合された酒」です。わたしたちが受けるべき神さまの裁きをキリストがお引き受けくださった。あの十字架で人間のすべての驕りは打ち砕かれたのです。

それだけではありません。三日目にキリストはよみがえられました。わたしたちが驕りではなく、驕りを捨てて、神さまに仕え、人に仕えて生きる新しい命を始めさせてくださいました。そこに救いがあります。冒頭で申しました、この詩編が礼拝の言葉であったことを思います。礼拝はサービスと言います。仕える、奉仕する。それはわたしたちの奉仕に先立ち、神さまがわたしたちに仕えてくださったことに根拠があります。神さまは御子をお与えになり、傲慢なわたしたちのために自らが僕となってその命をささげてくださいました。だからこそわたしたちはこの救いを讃え、神さまを礼拝します。喜んで神さまに仕えるのです。そして人に仕えていきます。驕りを捨てる生き方がそこから始まります。